

怪物

男 …… 生まれながらにゆがんだ身体を持つ男。その醜さゆえに、赤子の時に親に捨てられた過去を持つ。

娘 …… 富豪の娘。父親が溺愛のあまり、家から一步も出さないと評判の娘だったが、強盗に入った男にさらわれる。

若林 …… 若い刑事。男の犯した殺人事件に疑問を持ち、捜査に当たる。

富豪 …… 日本で一、二を争う資産家。男に強盗に入れられ、妻を殺され、娘をさらわれる。

隊長 …… 男とねぐらを共にする元軍人。弱い相手には横柄な態度を取るが、その実、何の力もない。

石橋 …… 男とねぐらを共にする気弱な男。石橋を叩くような性格からそう呼ばれるが、本名は誰も知らない。

加治 …… 若林の先輩にあたる刑事。男の事件を担当している。

S 1

暗闇

暗闇の中。何かを引きずるような足音だけが聞こえてくる。それは男の足音である。かすかな明かりの中から浮かび上がる男の腕には、何かが大事そうに抱きかかえられている。ずっと歩き続けてきたのだろうか、やがて疲れ切った様子で男は腰を下ろす。

雪が降っている。凍えるような寒さも、まるで意識に入らないかのように、男はじっと座り込んでいる。不意に、どこか遠くから、赤子の泣き声が聞こえてくる。男が顔を上げ、耳をすませると、それは男の腕に抱かれたモノから聞こえてくる。男はやがて、赤子をあやし始める。

その男の様子を、若林はじっと見ている。

若林 …… 彼は、どこで生まれたのかを知らない。なぜこの世に生を受けたかも知らない。かすかに耳に残るのは、激しい諍いと憎しみの声、落胆のため息。目に残るのは、醜く歪んだ母親の顔。そして身体に残るのは、凍るような寒さだけだ。

男 …… 俺はどうやって生き延びたかを知らない。物心ついた頃には、山に潜み、獣を食い、時には里に下りて人を殺す。まだ言い伝えや迷信が信じられていた時代、俺の起こした事件は崇りと呼ばれた。俺のことを知る者は、だれもいなかった。

若林 …… やがて戦争が始まり、焼け野原になってそれが終わった。町には手足を失った傷痕軍人があふれ、歪んだ身体を持つ彼を珍しがるものはいなかった。みな毎日を

男
生きるのに必死で、彼のことを気にかける者は、だれもいなかった。
俺は飽きていた。ただ生きるために生きる、その暮らしに飽きていた。家も金も
なかったが、困ることはなかった。どこに行けば何が手に入るか、俺はよく知っ
ていた。だがしかし、これ以上生きる意味があるのか、彼には分からなかった。
だれもが生きる指針を失った時代、彼はだれの目にも留まることはなかった。

若林
男はゆっくりと立ち上がり、また歩き始めようとする。
その時、男の手から赤子が滑り落ちる。
それは赤子ではなく、ひと束の古びた縄である。

男
……。

若林は、男をじっと見つめている。
男はやがて、その縄を拾い上げると、まるで自らに課せられた宿命であるかのよ
うに身体に背負い、歩き始める。その足取りは、先ほどまでよりもさらに重い。
やがてたどり着いた先で、男は黙って座り込む。

そこは拘置所の中である。
風が鳴っている。

S 2

取調室

昭和二十三年、東京。
警察署の取調室では、加治が調書をめくっている。
窓から入るすさまじい風に身を震わせ、調書を机に置くと、窓を閉め直す。

加治
冷えるな…。

若林
……。

加治
まあ、壁があるだけ感謝しなきゃならんか。雨風しのげん連中が、町には山ほど
いるからよ。

男をじっと見つめている若林を、加治はチラリと見て、また調書を手に取る。

加治
殺しも殺したり、十五人、か…。よくまあこれまで逃げ果せたもんだ。…見た
か。

若林
……？

加治
害者はみな目ん玉つぶされて、体を焼かれとった。

若林
…はい。

加治
ただの物盗りがそこまでやるか？人間のやることじゃねえ。

加治、調書を若林に渡す。
そこに挟まれていた被害者の写真を見て、若林は思わず目を背ける。

加治 …ま、もともと人間じゃねえか。
若林 まだ何もしゃべらないんですか？

加治 ああ。貝みたいに押し黙ったままよ。
若林 ……。

加治 まあ、黙り決め込んだところで証言は出そろってんだ。言い逃れはできねえよ。
若林 …まあ、間違いなくコレ（絞首刑）だろうな。
…でしようね。

なにかはつきりしない若林の態度に、加治は不思議そうに、

加治 …なんだ、不満か？

若林 …いえ。…ただ、

加治 …ただ？

若林 …なぜこんな事件を起こしたのか、と思ひまして。

加治 ……。

若林 …いったい何があったら、こんなにひどい殺し方ができるんでしょうか。それも、
十五人も…。

加治は、不意に席を立つ。

加治 …なんでもへったくれもあるか。時代の節目にや、こういうバカが必ず出てくる。
若林 …めずらしいことじゃねえよ。

若林 …でも、

なおも食い下がろうとする若林に、加治は調書を押し付ける。

それはまるで、話を断ち切ろうとするかのようなのである。

加治 …でも、は無しだ。

若林 ……。

加治 …そんなに知りたきや、口を割らせるこつたな。あいつに口があれば、の話だが。

若林は調書を受け取る。

加治 …明日の朝には、拘留所へ移動だ。話をしたきや、早くしろ。だが気をつけろよ。
あいつは片端だが、あの右手一本で何人も殺してる。ちょっとでも隙を見せたら
…。

加治は首を絞める真似をしてみせる。

加治 あいつは、怪物だ。

若林 ……。

風が鳴っている。

S 3

取調室

その日の夜、初めて若林は取調室で男と向き合っている。

男は全てを拒絶するかのように、うずくまっている。

若林 風が…出てきましたね。

男 ……。

若林 子供の頃、よく親父に脅かされました。こういう風がゴオゴオとうなる日は、山から鬼が下りてくる、と。幼かった僕は、風の音が鬼のうなり声のように思えて、いつも震えていたものです。…まあ、親父にしてみれば、風の強い日は危ないから外に出るな、という教訓のつもりだったのかもしれませんが、田舎を出て、街に上り、その街も焼かれて瓦礫の山になった今…思っんですよ。やっぱりあれは、鬼の声だったんじゃないかってね。

その時、ひとときわ強いうなり声がある。

その声に、男はふと顔を上げる。

若林 あなたにも、聞こえましたか？

男 ……。

若林 昔よりも、はるかに怖い…鬼の声…。

風が鳴っている。

男 …鬼じゃねえよ。

若林 え？

男 オレあ、怪物だ。

初めて二人は、目を合わせる。

男 …お前、何が知りたい？

若林 真実です。

男 (笑って) 真実なんて、言葉ほどいいもんじゃねえぞ。お天道様みたいなもんだ。パッと見きれいな見えても、あつという間に目をやかれる…。

若林 だから、目をつぶしたんですか？

間

若林 被害者の。

男 ……。

若林 人間は、都合のいい嘘を信じる生き物です。私なら、あなたを救えるかもしれません。

男、笑い出す。

男 救う、か。

若林 ……。

男 初めて聞いたよ。

男は一時、若林をじっと見つめると、やがて誰にともなく問いかけた。

男 だれからも見えない男が、だれかに見てもらえるようになるにはどうすればいい？

若林 それが…殺人を犯した理由ですか？

男 ……。

若林 自分の存在を見せつけるために。

男は、小さく笑う。

男 このご時世、人を殺すのに理由なんていらねえよ。

若林 ……。

男 あることないこと喚き立てて、都合のいいお話作って楽しんでるのは世間の連中だけよ。

若林 お話。

自重気味に言う男を、若林は見つめている。

若林 ……では、そのお話を聞かせてくれませんか。

男 ……。

若林 あなたの目からは、いったい何が起こっていたのか。この事件のあらましを…怪物と言われた男と、一人の娘の物語を。

男 ……。

若林 私はそれが知りたいんです。

風がうなりをあげる。

S 4

富豪の家

男は遠い記憶をたぐり寄せるように、口を開く。

男 最初の事件は…。

若林 昭和二十二年、三月十三日。

男 場所は。

若林 東京都麹町にある邸宅、富田一郎宅。

男 そうだ、その日の深夜、あの富豪の家に一人の男が忍び込んだ。

若林 富田家は戦前から続く資本家の家で、自宅の金庫にも多額の現金と貴金属類を所持していました。男は、慣れた手つきで金庫を破ると、金品を強奪。それを目撃した一郎さんの妻、富田和子さんを…。

男 殺害した。

銃声。

一人の女性が倒れていくのが見える。

若林

死因は出血性ショック死。銃弾は和子さんの胸部を貫通しており、ほぼ即死だったと思われます。

6

男は、倒れた女性をじっと見下ろしている。

男

…いつものことさ。どっかの家に押し入って、金だの食い物だのを奪っていく。別にめずらしいことじゃない。こんなご時世じゃ、だれかがどこかでやっつてることさ。だがあの日は…あの日…。

そのとき、部屋の暗がりから声がする。

娘

あなたは…だれ？

男

……！

隣の部屋から出てきたのだろうか、いつの間にか、男の背後に娘が立っている。

娘

あなたは…だれ？

やがて娘は、男の方へゆっくり近づいてくる。

暗闇に目が慣れないのか、その足取りは頼りなく、おぼつかない。

躊躇いがちにさし出された手を、男がかわしたとき、娘は母親の遺体に躓き、倒

れる。

身を起こした娘の手には、母親の血がベッタリとつき、真っ赤に染まっている。

……！

男は娘を殺そうと、手にしていたナイフを振り上げる。

しかしそれを振り下ろそうとした時、娘はなおも問いかけた。

どこへ行ったの？ ねえ…。

娘は母親の遺体も、男の姿も見えないかのように、辺りを見回している。

お前…目が、見えないのか…？

つぶやくような男の声を聞きつけて、娘は振り返る。

その顔には、うれしそうな笑顔が浮かんでいる。

そんなところにいたのね。

……。

どうしてこっちに來てくれないの？

再び、娘は手を差し伸べながら、男に近づいてくる。

男はその手から逃れるように身を引くと、ナイフを握りしめる。

ねえ…。

しかし、その気配に気づいたのか、娘は不意に振り返ると、男の腕を捕まえる。

……！

男は、思わず娘の手を振り払った。

娘はそのことに驚きながらも、同時に手のひらに残る男の身体感覚に、とまどっていた。

それは、今まで触れたことのない相手のものだった。

あなたは…だれ？

俺は…。

男は、答えに窮したまま、後ずさる。

なぜか男は、この娘を殺すことも、その場から逃げ出すこともできないでいた。

そのとき、屋敷の人間が駆けつけてくる音が聞こえてくる。

声 男
お嬢様……！ お嬢様、ご無事ですか……！
……！

娘もその声に、戸惑いをかくせない。

娘 声
あなたは……だれ？
お嬢様！

男は、とっさに嘘をつく。

男 娘 男
お屋敷に強盗が入ったのです。
強盗？

強盗は金目のものを奪い、屋敷の者を殺しています。ここには危険です。早く逃げて下さい。
……。

男 娘
安全なところまでお連れします。どうぞお外へ。さあ、早く……！

男は娘を追い立てるようにして、逃げようとする。

娘 男 娘
手を……。
……手？
手を、引いていただけませんか？

男はその言葉に、言いようのない恐れを感じる。
しかし、やがて躊躇いながらも、震える手を差し出し、娘の手を取る。

娘 男 娘
ありがとうございます……。
……。
暖かい手……。

娘は、手の形を確かめるかのように、何度も握り返す。

男
娘は美しかった。オレは初めて、女というものの手を取った。オレの醜く歪んだ手を、娘はまるで自分を守る王子の手であるかのようにそっと握った。そのとき、オレの体に走った衝撃は、お前には分からんだろう。

娘の姿は消えていく。

若林 喜びですか？

男 ……。

若林 不幸な生い立ちを抱えたあなたが、初めて受け入れられた。喜び、安堵、感動…
それとも、歪んだ欲望ですか？

男 滑稽だったのさ。

男は弾かれたように笑い出す。

男 オレはおかしくてたまらなくなつたんだ。こんなつまらん嘘で、簡単に人はだまされる。考えてもみる。俺が、この俺がだ。まるで苦難の姫を救う白馬の王子だ。こんなことがあり得るか？

男は不意に、笑いをやめる。

男 だったら、今までの俺は何なんだ。ただ姿が見えない、それだけのことで受け入れられるなら、全ての原因は生まれつきのこの体ということになる。だが…。
……。

男 その時気づくべきだったんだろうな。娘がなんで、簡単に俺の嘘を信じたのか…。

S 5 防空壕跡

空襲の傷跡がそのまま残る町の外れ。

中心地のにぎわいを離れ、まるで世の中から忘れ去られてしまったかのような焼け跡に、その隠れ家はあった。

防空壕の跡を利用したその隠れ家は、薄暗く、空気は淀んでいる。

神経質そうな男が、部屋の片隅で空き缶に溜め込んだ小銭を数えている。

どこからか拾ってきたのであろう、毛羽立った畳の上に寝転がっていた男が、うるさそうに体を起こす。

隊長 おい、いい加減にしろ。

しかし、石橋は聞こえなかったかのように小銭を数え続ける。

隊長 聞こえねえのか。いい加減にしろって言ってんだ。数えたって、中身は変わりやしねえよ。毎日毎日朝昼晩とジャラジャラ聞かされるこっちの身にもなってみろってんだ。

石橋は数え続ける。

隊長 ちっ…ああなつた途端、もう耳も聞こえやしねえ。

隊長は面倒くさそうに立ち上がると、石橋の抱えている空き缶を取り上げる。

石橋 お、おい！返してくれ。

隊長 ジャラジャラ数えるのをやめるなら、返してやるよ。

石橋 数えねえ、もう数えねえから…！

隊長、空き缶を渡す。

石橋は、それをさも大事そうに抱きかかえると、また中身を確かめ始める。

隊長 だから、うるせえって言ってんだろ。

石橋 数えてねえ、確かめてるだけだ。

隊長 俺はうるせえからやめろって言うてるんだよ。

隊長はまた取り上げようとするが、石橋はあわてて逃げる。

隊長 クソッ！ここが軍隊だったらな、てめえみたいな部下は真っ先に前線に叩き込んでやったのによ。

石橋 (小声で) 戦地に行ったこともねえクセに…。

隊長 なんだと!?

隊長が声を荒げると、石橋は身をすくませる。
そこに、男が戻ってくる。

隊長 おう、旦那、今日はえらく帰りが遅いじゃねえか。なんかいい出物でもあったのか。それとも、何かしくじったか。

男は、黙って袋を放り出す。

隊長はその中をのぞいて、小さく歓声を上げる。

その声に、石橋もつられて袋を覗き込む。

隊長 おい、見ろ。百円札がこんなに…！

石橋 これだけありや、当分は食うには困らねえ。

二人、笑い合う。

隊長 おい、お前、どこのお屋敷をやってきたんだ。

男 麴町の、富豪の家だ。

隊長 麴町のとって…。

石橋はふと鼻をひくつかせる。

石橋　お、おい、血の匂いがするぞ……。お前、また人を殺したのか？
男　ああ、女房を一人、殺した。

その時、隊長は男が襲った家に思い当たる。

隊長　お前……麴町の富豪って、富田の旦那のことか？

石橋　……………！

おめえ……またとんでもねえことやらかしたな。富田の旦那っていやあ、日本で一、二を争う資本家じゃねえか。今ごろ、東京中が蜂の巣をつついたような大騒ぎになってるぞ。

石橋、逃げるように袋を放り出す。

石橋　お、俺は知らねえ。俺は何にも見てねえぞ。

そう言っつて、石橋はまたジャラジャラと小銭をあさり始める。
が、男は気にしている様子もない。

隊長　おい……おい……！

男　……………。

隊長　おい、悪いこたあ言わねえ、今すぐ町を出ろ。

男　……………。

隊長　こんなとこ、すぐに見つかっちゃうに決まってんじゃねえか。

男　……………。

隊長　俺たちまで巻き込まれるだろうが。てめえの気違いにつきあう気はねえぞ。

男　……………。

隊長　だから、とつとと出てけっつて言っつてんだよ！

男につかみかろうとする隊長の首を、男はつかみあげる。

おい、勘違いするなよ。ここはもともと俺のねぐらだ。転がり込んできたてめえらに、とやかく言われる筋合いはねえ。

男は隊長を放り出す。

隊長　あ、ああ……。わかってるよ……。

男　話がある。

隊長　……………？

男 娘をさらってきた。
隊長 なに？

男 富豪の娘だ。そいつを人質に、奴から大金を巻き上げる。

隊長 お前…本気で言ってるのか。

男 俺が冗談を言うように見えるか？

隊長 ……。

男が促すと、あわてて入り口から外をのぞき見る。

そこには、たしかに娘が座って、招き入れられるのを待っている。

石橋 お前、あれだろ？ あれってその、あの富豪の旦那が目に入れても痛くないほど可愛がってるっていう…。

男 ああ。

石橋 かわいくってかわいくって、悪い虫がつかねえように、家から一步も外に出さねえって評判の…。

男 その娘だ。

石橋 もうダメだ…もうおしまいだ…。

絶望したようにうなだれる石橋。

しかし隊長はいぶかしげに、

隊長 …しかし、いったいどうやって連れてきたんだ。ありや、無理矢理さらわれたって感じじゃねえぞ。

男は、近くに寄れ、という合図をする。

隊長はいぶかしみながらも、男のそばに寄るが、石橋は怯えて動こうとしない。

隊長 (石橋に) お前も来るんだよ。

隊長は、石橋を引きずり寄せる。

男 タベのことだ。俺があん富豪の屋敷に押し入って、女房を殺したとき、折悪しくあいつは隣の部屋から出てきたんだ。

石橋 それじゃ…！

男 が、あいつは目が見えねえ。俺がだれかも、何が起こってるかも気づかなかった。そこで俺はとっさに嘘をついた。強盗が来たから、あんたを逃がしにきたんだ、ってな。

隊長 そんなバカなこと…。

男 それが信じやがったのよ。俺が思うに、どうやらあの娘は、頭が少々足りないらしい。

二人

……。

男

いいか、話がまとまるまでの間、あいつにはこの嘘を突き通すんだ。そうすりゃ、あいつは逃げ出さねえ。逃げねえ人質ほど楽なものほねえからな。

石橋

で、でもよ……どうやって。

男

よく聞け。ここは親父が用意していた、秘密の隠れ家だ。

二人

秘密の隠れ家？

石橋

この防空壕が？

男

そこには元軍人の屈強な護衛がいる。

二人

屈強な護衛？

隊長

だれだよ？

男

お前だよ。

隊長

俺が？

男

いつも散々手柄話をしてんじゃねえか。俺が軍隊にいたときはどうしたこうした、ってな。

石橋

(笑って)なるほど、そりゃいい。

隊長

おい、何がおかしいんだ。

男

で、石橋、お前はここの家の主人だ。

石橋

お、俺？

男

金を貯めて郊外に家を買って、のんびり暮らすんだろ。

隊長

(笑って)あの缶からの小銭でな。

石橋

なんだよ！いいだろ！

隊長

あんなもん、数日の飯代にもなりやしねえ。

男

俺は奴の親父と話をまとめてくる。俺がいない間、せいぜいお嬢様のお世話をし
てやってくれ。……どうだ。

二人は、顔を見合わせる。

石橋

……ダメだ、ダメだ！……こんなうまくいきつこない！

だが、隊長はいくらか興味を引かれて、

それで……実際のところ、お前、いくら要求する気なんだ。

男

(耳打ち)

二人

え！？

男

三人で山分けしたって、十年は遊んで暮らせるぞ。

隊長

た、たしかに……。

男

お前も、銀座の一等地にでっかい家を建てられるぞ。

石橋

お、俺はもっと、小さな家でいいんだ。郊外の、小さな家で……。

男

どっちでも好きにしる。でもな、考えてみる。今までの俺たちは、この世にいて
もいなくても変わらねえ、ゴミみたいな存在だ。明日、ここでのたれ死んでも、

だれも気がつきやしねえ。そんな俺たちが、この世間って奴に、どでかい復讐を
してやろうってんだ。おもしろいじゃねえか。

二人

こんな機会、二度はねえぞ。

隊長 ……いいだろう、乗った。

石橋 お、おい、隊長…！

隊長 だがな、もしヤバいと思ったときには、俺は真っ先に逃げるからな。

男 好きにしろ。

男は娘を迎えにいくとする。

石橋 ちよ、ちょっと待ってくれよ。俺は、まだ…。

隊長 うるせえな。俺がやるって決めたんだから、お前は従うしかねえんだよ。

石橋 そりやねえよ。俺だって一応…おい、ちょっと待てよ！

男は、娘を連れて戻ってくる。

娘を見た途端、緊張のあまり固まる二人。

男 お待たせして申し訳ありません。ようやく、話がつきましたので…。

娘 ここが…お父様のお知り合いのお宅？

男 はい。

娘 私の秘密の隠れ家なのね。

その言葉には、どこか状況を楽しんでいるような、ウキウキした響きがある。

娘は辺りを確かめるように見回しながら、歩き始める。

あわててそれを止める、男たち。

男 足下に、お気をつけ下さい。

娘 ごめんなさい。私、これまで屋敷の外に出していただいたことがないので、つ
いうれしくなってしまうました。…こんなときに、不謹慎でしたわね。

男 ご紹介しましょう。今回、お嬢様をかくまっていたいただいた、この家の主で、石橋
さんです。

娘 はじめまして。

石橋、緊張して固まっている。

隊長、何か挨拶をしろ、というように、石橋をつつく。

石橋 (どもりながら) は…じ…め…まして。

娘 どうかされたのかしら。

男たちは、どうしたものかと一瞬顔を見合わせるが、ごまかすように、

隊長 お嬢様の美しさに、緊張しているのでしょう。

娘 あら、お上手ね。

男 そしてお嬢様とこの家の警護を担当します、早川少尉です。我々はみな、隊長、と呼んでおります。

娘 隊長さん。

隊長 はっ、戦時中はサイパンで部隊を率いております、この通り、勲章もいただいております。

娘 まあ、すごい！

手を伸ばす娘に、隊長は慌ててポケットからガラクタを取り出すと、勲章の代わりに娘に差し出す。

娘 さぞかし勇敢なお方なんでしょうね。

隊長 それは…まあ。

開けっぴろげな褒め言葉に、隊長はまんざらでもなさそうに頬を緩ませるが、石橋につつかれて我に帰る。

隊長 全力で、お嬢様をお守りさせていただきます。

娘 光栄ですわ。

男 私はお父様との連絡役を務めます。あまりお側にはおれませんが、お二人が身の回りのことをしてくれると思います。

娘 あら、たった二人？

娘の無邪気な問いに、三人は思わず言葉を失う。

隊長 今はこのような時ですから、人の出入りは少ない方が良くと思っております。

娘 ……。

娘は、ちよつとの間考える。

その答えを固唾をのんで待つ三人。

娘 (笑って) それもそうですわね。

三人はほっと肩を撫で下ろす。

娘 お宅の中を見せていただいてもよろしいかしら？

そう言うと、娘は勝手に歩き出す。
それをあわてて追いかける三人。

男
娘
男
（引き止めて）…足下にお気をつけ下さい。
あら、お氣遣いいただきなくても。
石橋が、ご案内させていただきますので。

そう言うと、男は石橋に娘の手を取らせる。

石橋
娘
石橋
娘
え、あの、俺…。
ところで石橋さん。
は、はい！
ずいぶんと狭い感じがしますが、ここは、裏口かなにかなのかしら？

三人はまた顔を見合わせる。

石橋
娘
石橋
娘
あ、いえ、あの…居間でございます。お嬢様のお屋敷のような、大きなお屋敷ではないものですから。
あら、ごめんなさい。そんなつもりじゃ…。
いえ、こちらこそ、このような所で、申し訳ありません、はい…。

娘は、ちよつと姿勢を正して、石橋に向き合う。

娘
石橋
それじゃ、ご主人さん、どんなお宅なのか、教えていただけます？
ご主人…？

石橋は、ちよつとの間考えて、やがて話し始める。

石橋
本当に…大きな家ではないんです。入り口を入ると、小さな土間があつて、すぐに居間になっています。玄関はありません。僕、あんまり玄関が好きじゃないんです。なんだか、キチツとしてるっていうか、子供のころ住んでいたのが田舎でしたから、立派な門構えのある家なんかなくて、いつも縁側から出入りしてましたから、玄関がある家に行くと、かしこまっちゃって、のんびりできないんです。右手には、襖で仕切られた寝室があります。

襖？

隊長
石橋
寝室からは、いつも庭が見えます。庭にはいろんな花が咲いています。でも、きちんと植えてるわけじゃないんです。いろんな所から飛んできた草木の種が、季節の花を咲かせてくれるんです。居間の裏手には、小さな台所があつて、水場があつて、それから二階に上がる階段が…。

そこまで話して、ふと夢中になっていた自分に気づき、石橋は恥ずかしそうに口をつぐむ。

石橋 調子に乗ってしゃべりすぎました。あの…申し訳ありません。
娘 そんなことありませんよ。このお宅の様子が、生き生きと私のまぶたに浮かんできました。本当に素敵なお家ですね。

娘の言葉に、石橋はうれしそうに顔を輝かせる。

石橋 ありがとうございます…ありがとうございます…!!
娘 私も、そんなお家に住んでみたかった…。
石橋 え…？

娘、不意に床に腰を下ろそうとする。
隊長、あわててそのお尻の下に古びた座布団を滑り込ませる。

娘 どうかされました？
隊長 いえ、お座布団を…。
娘 そんな、お気遣いなく。

隊長は石橋を横に連れて行き、小声で、

隊長 馬鹿野郎。どこに襖だの庭だの花があるんだよ。
石橋 あ…。
隊長 もう少しだましやすすい話にしろ！

男は娘に向き直ると、

男 あの、お嬢様…。
娘 はい。

男 よろしければ、いろいろと身の回りのものを仕入れにいこうと思うのですが…。
娘 あの、なにぶん急な話でしたので、お迎えする準備がまるで整っておらず…。
男 あら、気にしないでくださいな。ちょっとくらい不慣れな方が、逃亡生活、って感じがして、素敵ですもの。

娘は、まるでそれを楽しんでいるかのように笑っている。

娘 悪者に追われているんですもの、贅沢は言ってもらえないわ。

隊長は、やっぱり頭がおかしい、という身振りをして、声を潜めて笑い出す。

男は足を止める。

娘 これでは、あんまりじゃありませんか。犬や猫じゃあるまいに。同じ人間にすることではありません。

……。

娘 男
では、いずれ教えていただけませんか。私のことを助けてくれた、勇気ある人……。本当にありがとう。

娘、深々と頭を下げる。

男 ……。

場の空気と、娘との会話に耐えきれなくなった隊長と石橋は、あかるく、話題を
変えるように、

隊長 それでは、私どもは買い物に…。

男 お、おい…！

石橋 あの、お嬢様、お腹がすいてはおりませんか？

娘 はい、とても！

石橋 すぐに何か、ご用意いたしましょう。

隊長 なんてことはありません。我々には、強い味方がついておりますから。

と、男が持ち帰った袋を持ち上げてみせる。

男 おい、それなら、俺が…。

言いかけた男を、二人は遮るように、

石橋 ではしばし、お待ちくださいませ。

隊長 (小声で) あとを頼んだぞ。

男 おい…！

二人、逃げるように駆け出していく。

男 俺はお前らに世話をしろって言ったんだ…。

娘は、微笑みながら二人を見送っている。

娘 とても良い方たちですね。

男 ……。

娘 私、安心しました。

男 そうですか。

娘 私、これまでお屋敷から外に出してもらったことがありませんでしたから、すごく不安だったんですけど…でも今は、とても楽しいんです。

男は、その娘の言葉に、いくらか違和感を感じる。

これは、本当に溺愛された娘の言うことだろうか。

娘 一つ、聞いてもいいですか。

男 なんです？

娘 ご両親は、どんな方ですか？

男は一瞬、答えに窮する。

両親のことなど、これまで考えたこともない。

男 …なぜです。

なぜか娘は一瞬の躊躇いの後、無邪気な笑顔を見せる。

娘 私を守って下さった恩人のこと、もっと知りたいと思うのはおかしいことですか？

間

男 さて…どうですかね。

男ははぐらかそうとするが、娘はその見えない目で、じっと男を見つめている。やがて口から出た答えは、男自身が思いもしなかったものだった。

…優しい母親と、立派な父でしたよ。

…。

でも、戦争で行方知れずになりましたね。今じゃどこでどうしているか…。せめて生きていてくれたらと、そう思っちゃいるんですけどね。

そう…。

…。

会いたい？

…え？

ご両親に？

間

男

ええ、そうですね…。

娘

……。

男

ずっと…ずっとね、探しているんですよ。

S 6

取調室

男

それから、俺たちの奇妙な共同生活が始まった。俺たちがついた嘘の中で、崩れかけた防空壕跡は郊外の小さな家になった。そして石橋はその主人になり、隊長は勇敢な護衛になった。不思議なものでな、こんな陰気な防空壕跡も、居心地がいいと嘘をつけばつくほどに、ちったあましに見えてくる。病は気からとはいけどよ。なるほど、人は心の持ちようでこれほど変わるものかと思ったよ。

若林

……。

男

石橋は、あの日以来、娘にすっかりなついちまってな、このまま家を買うのをあきらめて、防空壕に居着くんじゃねえかって、ヒヤヒヤしたよ。隊長は隊長で、軍隊での手柄話を娘にしちゃあ、すごいすこいと褒められて、いい気になってやる。なんてこたあねえ。全部大ボラよ。予科練上がりで戦地なんて見たこともねえんだからよ。が、娘と話するときだけは、あいつは英雄でいられたんだ。人は、都合のいい嘘を信じたがる…。

若林

それが人の嘘でも、自分のついた嘘でも…。

男

間

若林

幸せでしたか？

男

……。

若林

その暮らしは。

間

男

さあな。だが、娘のいた十日間…。その十日間で、俺たちの暮らしはガラリと変わった。だが、俺のいた十日間…。その十日間で、俺たちの暮らしはガラリと変わった。俺たちは大胆になった。そして何もかもが、不思議とうまくいった。あのときのオレたちに怖いものは何もなかった。

若林

……。

男

だが一つうまくいけば、一つ嘘が増えた。嘘が一つ大きくなるごとに、欲が一つ増えた。そしてあいつも…。

何かを求めるように、手を伸ばす娘の姿が見える。

男

日に日に要求をエスカレートさせていった。

娘 もっとよ。もっとちようだい。

男 まるで、心に潜む何かを振り切ろうとするかのよう……

娘 もっと、もっと……

若林 一度贅沢を味わえば、もう貧しさには戻れない。

男 そうだ。

若林 そして人間の欲望に際限はない。

娘 もっとよ。もっとちようだい。私の身も心も、全てが埋め尽くされるほどに。

若林 もっと多く、他人より多く……

娘 私の存在が、消えてなくなってしまうほどに。

男 それでも、オレたちは満たされていた。オレたちには目的があったからだ。そう
だ。オレたちには、やるべきことがあった。今、生きる意味が。その理想に向か
う限り、オレたちに敵はなかった。

若林 ……

男 その一方で、俺たちに対する悪評は広がるばかりだった。

S 7 町

富豪 聞いたか。

町の人 聞いたとも。

町の人 あの噂を。

町の人 聞いたとも。

町の人 耳に入らぬはずがない。

富豪 旦那の娘がさらわれた。

町の人 かねてから評判のあの娘。

町の人 だれもお目にかかったことがない。

町の人 まるで天女のような美しさ。

町の人 だれもお目にかかったことがない。

全員 その一人娘がさらわれた。

富豪 おかしいそうな旦那様。

町の人 あれほど愛した奥様をなくされ、

町の人 溺愛した娘は悪党の手に。

町の人 今はどんな目に遭わされていることが。

全員 おかしいそうな旦那様。

富豪 しかもその盗人が、

町の人 強盗。

町の人 誘拐犯。

町の人 人殺し。

町の人 極悪人が。

富豪 町を荒らし回っているらしい。

町の人々、驚く。

町の人 近ごろ頻発している強盗事件。

町の人 それが奴らの仕業だそうだ。

町の人 男の一人は軍人崩れ。

町の人 フィリピンのジャングルで気が狂い、

町の人 人を痛めつけるのが、生きがいだとか。

町の人 一人は陰のある男。

町の人 特高上がりの拷問魔。

町の人 あの男にいらまれて、生きて帰ったものはいないという。

富豪 だが何より恐ろしいのは、あの男。

町の人 人とは思えぬあの姿。

町の人 一目見た者は心が凍り、

町の人 二目見たときには命はない。

町の人 悪魔のようなあの姿。

町の人 どうする。

町の人 どうする。

町の人 どうすればいい。

町の人 もし奴らに手を出せば、

町の人 娘は悪党どもに八つ裂きに。

全員 おかわいそうな旦那様！

町の人 法外な身代金を用意して、

町の人 娘を返すよう呼びかけた。

全員 おかわいそうな旦那様！

町の人々、去っていく。

その噂話を、満足そうに聞いている富豪。

S 8

富豪の屋敷

富豪の屋敷に、隊長が連れられてくる。

隊長 おい、離せ！…離せ！

富豪の合図で、隊長は乱暴に投げ出される。

隊長 何しやがんだ、このヤロウ！

富豪 …すまないね、手荒な真似をして。

富豪に声をかけられて、隊長は初めてその存在に気づく。

隊長 あんたは…！

あわてて逃げようとする隊長だったが、富豪の手下に道を塞がれる。

富豪 ああ、そう心配することはない。別に君をこの場でどうしようというつもりはない。

富豪は隊長に、椅子に座るように目で促す。

警戒しながらも、おずおずと椅子に腰掛ける隊長。

富豪 娘は元気かね。

隊長 …はあ。

生返事を返してから、隊長はハッと気づいて、

隊長 自分らは、本当に、何もしておりません！娘さんには、誓って、指一本…！あの、本当に、丁重にお預かりしているだけで…。

だが富豪は、その隊長の言葉をろくに聞きもせず、

富豪 そうか。それなら良かった。

隊長 ……。

娘のことをまるで案じていない富豪の様子に、隊長は却って動揺する。

富豪はそれにも気づかぬそぶり、言葉を続ける。

富豪 迷惑はかけていないだろうね。あの子は変わったところがあるから。あまりわが

ままを言うようなら、きちんと叱ってやってくれたまえ。気にすることはない。

私もあの子には、ほとほと手を焼いたからね。

隊長 いえ、そんな…。

富豪は、ポケットから分厚い札束を取り出すと、隊長の足下に放る。

富豪 何かと物入りだろう。使いたまえ。

隊長 ……どういふことでありますか。

富豪 何かかね。

隊長 自分たちは、その、娘さんを誘拐したのであります…。

富豪 その話し方はやめたまえ。別に私は、君の上官でもなんでもない。

隊長 ……。

富豪
隊長
隊長
隊長
だいたい、もうそんな時代じゃないよ。
は…。

富豪
隊長
隊長
隊長
もちろんそれは知っているとも。だからこうして、手間賃を払っているんじゃないか。

富豪
隊長
隊長
隊長
そう言うと、富豪は放った札束をあごで指し示す。
隊長は、まだそれを拾ったものかどうか、判断できずにいる。

富豪
隊長
隊長
隊長
……。

富豪
隊長
隊長
隊長
心配することはない。金には毒も薬もない。金は、金だ。

富豪
隊長
隊長
隊長
隊長は、ついに我慢しきれなくなって、椅子から飛び降りるようにして札束を拾う。

富豪
隊長
隊長
隊長
札束をめくり、金額を確かめると、一気に顔がほころぶ。

富豪
隊長
隊長
隊長
やがて、それを見ている富豪に気づいて、媚びた笑いを浮かべる。

富豪
隊長
隊長
隊長
あ、いや…。こりやどうも…。

富豪
隊長
隊長
隊長
札束を懐に入れ、再び椅子に腰掛ける隊長を、富豪は満足げに見ている。

富豪
隊長
隊長
隊長
それで、いつがいいかね。

富豪
隊長
隊長
隊長
いつ？

富豪
隊長
隊長
隊長
いつ、娘を返してくれるのか、聞いているんだよ。

富豪
隊長
隊長
隊長
隊長は、ハッと気づいて、

富豪
隊長
隊長
隊長
あ…失礼いたしました！ いつでも、「用意はできております。」(富豪の視線に気づいて、言葉を変える)あの、いえ、なんでしたら、今からでも「案内いたします。ええ、もう、すぐにでも。

富豪
隊長
隊長
隊長
おいおい、しっかりしてくれたまえ。
は？

富豪
隊長
隊長
隊長
物事には順序というものがあるだろう。君は誘拐犯で、私は被害者の父親だ。取引だよ。身代金だよ。私は商売人だからね、取引はきちんとやりたいんだ。受け渡しはいつがいい。

富豪
隊長
隊長
隊長
そりゃ、いつでも…。

富豪
隊長
隊長
隊長
では明後日にしよう。場所は、荒川の河口にある、あばら屋だ。なに、行けばすぐに分かる。あの辺りなら人目もないし、君たちにも都合が良からう。

富豪
隊長
隊長
隊長
はあ…。

富豪
隊長
隊長
隊長
明日、町のあちこちに張り紙を出す。仲間知らせたまえ。もちろん、今日のことは、他言無用だ。

隊長 はい。

富豪 そして一つ二つ、君に頼みがある。取引には、必ず彼も連れてくること。

隊長 彼？

富豪 せむしの彼だ。彼がいなくてはいけない。そして娘を連れてこなかったり、取引を逃げ出すようなことがないように。うまく話を合わせて、そう仕向けたまえ。

隊長 ……はい。

富豪 それさえきちんとしてくれれば、君は身代金の分け前の他に、さらに報酬を得ることになるだろう。

隊長は、懐に入れた札束を握りしめる。

富豪 できるかね？

隊長 はっ！ もちろんであります！…もちろんです。

富豪は、満足げにうなずくと、さも今思いついたかのように、

富豪 ああ、それともう一つ、君に用意しておいて欲しいものがある。

隊長 なんでしょう？…どんなものでも用意させていただきます。

富豪は、隊長を側に招き寄せると、耳打ちをする。

隊長の顔が、みるみる驚きにこわばっていく。

隊長 あんた…。

富豪 もちろん、これは私と君の間の秘密だ。君の仲間にも、決して言うてはいけない。

富豪は、もう一つ札束を取り出すと、隊長に差し出す。

富豪 分かったかね。

一時、躊躇する隊長。

が、やがて札束を受け取ると、ポケットにねじ込む。

隊長 ……分かりました。

富豪は去っていく。

富豪の姿が消えた途端、隊長の手が震えだす。

それを押し込めるように、拳を握りしめる隊長。

防空壕に、ビラを持った石橋がかけこんでくる。

石橋　おい、大変だ…！

男、うるさそうに出てくる。

男　なんだ。

石橋　これを見てくれよ。町のあちこちに貼ってあったんだ。

石橋の差し出したビラを見て、男は思わず奪い取る。

石橋　富豪の親父からの伝言だ。要求通り、娘の身代金を払うとよ！

二人は顔を見合わせると、思わず笑い出す。

男　こうもうまくいくとはな。

石橋　あんまりバカらしすぎて、気が抜けらあ。

隊長　…ああ、全くだな。

隊長は、何事もなかったかのように、話の輪に入っていく。

隊長　旦那の読み通りってわけだ。これで明日にや、俺たちや本物の大金持ちになれるってわけだ。

三人は、また笑う。

が、石橋はふと顔を曇らせて、

ただだよ…。

なんだよ。

そうになると、もうあの子とは会えなくなるんだな。

男と隊長は、顔を見合わせる。

男　当たり前だ。あいつは人質だ。金と引き換えに渡したら、もう一生さよならだ。

石橋　……。

男　そんなこと、最初っから分かってたことだろうが。

石橋　そうだけど…そりゃそうなんだけどよ。

男　だけど、なんだ。

石橋は、言おうか言うまいか、口の中でモゴモゴしているが、やがて思い切って

口を開く。

石橋 俺、寂しくてよ。

男 ……。

石橋 なあ、金だけもらってよ、あの子は返さない、ってわけにはいかねえかな。

男 なに？

石橋 だからさ、どっか違うところに隠しといてよ、どうにか金だけとって逃げるって…
わけには…。

次第に、声を失っていく。

隊長は割って入るようにして、

隊長 あのな、あの娘をさらってきたってだけでも、とんでもねえことなんだぞ。これ

石橋 以上無茶してどうするんだよ。余計な真似すると、今度こそドツボにはまるぞ。

分かってるよ、分かってるけど…。

隊長 おい、お前もなんとか言ってくれよ。このバカに。

男 ……。

隊長 おい！

男は我に返ったように、

男 ああ…そうだな。

隊長 なんだよ、その生返事は…。

隊長は、何か考えている男を見て、焦り始める。

隊長 おい。

男 ……。

隊長 お前、何を考えてる。

男 なんでもねえ。

隊長 まさかお前まで返したくねえ、なんて思ってねえだろうな。

男 ……。

隊長 あの娘を。

男 ……。

隊長 惚れたのか。

男 馬鹿言うな。

隊長 (笑って) せむしが女を好きになるとはな。

男は隊長の胸ぐらをつかむと、憎々しげに睨みつける。

隊長 冗談だよ。

男 ……。

隊長 そう怒るなって。お前にその気がねえんなら、それでいいんだよ。

男 ……心配しなくても、取引はきっちりやるさ。

隊長 ああ、きっちり頼むぜ。もうこれ以上の綱渡りは、俺はごめんだからな。さっさと金もらって、しまいにしようや。

男 ……。

隊長 そしたら、お前らとも、これっきりかもな。

隊長はそう言うと、出て行くようにする。

男 どこへ行く。

隊長 別に。

男 ……。

隊長 野暮用だよ。

男 ……。

隊長、出て行く。

石橋はそれを見送ると、そっと男に近づいてくる。

石橋 おい。

男 ……。

石橋 おい。

男 ……。

石橋 お前…本当の所はどう思ってたんだ。

男 ……何がだ。

石橋 あの娘のこと。

男 どうもこうもねえ。ただの金づるだ。

石橋 そうか…。

男 ……。

石橋 俺はよ、あいつの前にいるときはさ、人間でいられるんだよな。あいつ、俺のことを石橋さん、とか、ご主人、なんて呼んでくれるんだぜ。俺、初めてだよ。そりゃ、金は欲しいよ。こんな嘘の家じゃなく、本当の家が欲しいしよ、俺、そこで子犬を飼うんだ。こんなちっちゃくて、白と黒のまだらの子犬。絶対俺になつてくれて、絶対俺を裏切ったりしない奴さ。だけどなあ、俺、そこにあの子がいてくれたら、もっといいだろうな、って思うんだよ。あの子がそばにいてくれたら、俺、ひよっとしたら子犬がいなくてもいいかもしれねえ。

男 石橋 女が欲しいなら、別のを見つけれ。金持ちになりゃあ、女なんてすぐ引っかかる。そんなんじゃないやねえんだよ。だってそいつらはどうせ、俺のことをバカにするに決まってる。口先だけは従う振りして、裏では俺のことを笑いものにしようがんだ。

男 ……
石橋 でもあの子は違う。そうだろ。あの子は俺のことを、石橋さんって呼んでくれるんだぜ。

男 そりやお前が、立派な家のご主人だと思ってるからさ。
石橋 だからさ、金だけ手に入れて、娘を返さなきゃいいんじゃないか？それで家を買って、それからそこに連れてけば…。

男 嘘は、嘘だ。

石橋 ……

男 本当にはならねえよ。

石橋は、悔しそうにうなだれる。

男 子犬を買えよ。白と黒の、まだらの子犬。犬は人間を裏切らねえ。

男は取引の支度にかかるうとする。

石橋 お前だって…。

男 ……

石橋 お前だって、てめえの身体のこと隠してるじゃねえか。てめえの身体が、どんだけ醜く歪んでるか…。

男 バレて怖がられたら、元も子もねえからだ。…ただ、それだけだ。

石橋 でもよ、あいつの前で普通の人間ぶってるお前を見るとな、時々お前が真っ当に見えるときがあるぜ。

男 ……

石橋 お前だって、気づいてんだらうによ…。

男 ……

石橋、寂しそうに去る。

S 1 0

防空壕跡

男 もうすぐ…お屋敷に帰れることになりそうです。

娘 ……

男 お父様からご連絡をいただきまして、犯人の居場所が分かったそうです。今日明日にも捕まえて、お迎えにいらっしゃるそうです。

娘 そうですか…。

だが娘は、あまりうれしそうではない。

男 どうかしましたか。

……。
お嬢様。

いえ、なんでもありません。

……。

ただ…皆さんとお別れするかと思うと、寂しくなりまして。

……。

でも、また会えますものね。いつでも、私、会いに来れますものね。今度こそ、お父様のお許しをいただいて、ここまで…。

言いかけて、娘はうなだれた。

娘は、家に戻れば二度と出られないことを知っている。

そしてまた、男たちももうここにはいないだろう。

娘は、ふと思いついて、

一緒にお屋敷に戻りませんか？

…え？

お父様に頼んでみます。石橋さんも、隊長さんも一緒に、お屋敷にお住まいになればいいんです。そうすれば、ずっと皆さんといっしょにいられるじゃありませんか！

いけません！

…なぜです。

一緒に行くことはできないのです。

だから、なぜです。

男は、なんと答えていいか分からず、しばらく言葉に詰まる。

それも…教えていただけないのですか？

やがて、男は絞り出すように、

私とあなたでは、立場が違います。

…立場？

あなたご自分のお立場を分かっていらつしやらないのです。お嬢様のような方がたにしてみれば、本来私たちなど、言葉を交わすどころか、目にも止まらぬ存在です。私のようなものがあることすら、知ることはないでしょう。

……。

それでいいのです。そういうものなのです。この十日間、私たちは過分な夢を見せていただきました。ほんの一時ではありましたが、お嬢様とすごしたこの時間、楽しゆうございました。ですが、あるべき場所へ帰るときです。泥の中を這いずる虫は、所詮清らかな水の中では生きていけないものなのです。

男 娘

男 娘 男

娘

娘 男 娘 男

娘 男 娘

娘 男 娘 男 娘 男 娘

娘 男 娘

…では、私が残ると言ったらどうしますか。
……！

私が、もうあの冷たい、清らかな川には戻らないと言ったら。

男は一時、言葉を失う。

娘

私は、本気ですよ。

娘、手を差し出す。

引き寄せられるように、その手を取る男。

娘は男の手を握りながら、もう一方の手を男の頭上に伸ばす。

男

……？

疑問に思う男だったが、ふと、娘の意図に気づく。

娘は、男の顔に触れようとしている。

普通の人間なら、顔があるであろう位置に手を伸ばしているのである。

男は、思わず娘の手を離し、身を引く。

男 娘 男 娘 男

いけません…！

……。

いけません、いけません…！

なぜです。私にはこうする以外、あなたのお顔さえ見ることができないのに。

必要のないことです。私は、お嬢様が相手にするような者ではありません。

名前で呼んでくれませんか。セツと。ここはまだ、お屋敷ではないのですから。

男は、諭すように、

…お嬢様。

……。

あなたはご存じないのです。

え？

男 娘 男 娘 男

あなたと私の間には深い…この世のどんな谷よりも深い闇が横たわっているのです。太陽の光も、決してその深淵をのぞくことはなく、音も、光も、命さえも、全てを飲み込んでしまう深い闇…。私をこの世のすべてから引き離す闇が、片時も離れることなく、私の前にあるのです。それは逃れられない運命なのです。

……。

男 娘

あなたは光です。あなたが一步でもこの間に踏み込めば、その光はたちどころにかき消され、散り散りになってこの世界の記憶から抹消されていくことでしょう。私には、それは耐えられません…。

男 娘 男 娘

……。
どうかこれ以上、このせむしを苦しめないでやって下さい。

……。

あなたはあなたのあるべき場所へ。あなたを愛する家族の下へ、お帰りください。

男は、その言葉が娘を深く傷つけていることを、気づいていない。

…分かりました。

……。

では、送ってください。

娘 男 娘

S 1 1

荒川の河口

男

取引の日の朝早く、俺と隊長は荷車に娘を隠して防空壕を出た。風の強い日だった。そういえば、台風がどうこうと町の人間が噂していたことを、俺はぼんやりと思い出していた。このまま大雨になったら、あのオンボロの防空壕の中には水が入ってくるだろう。また、住処を変えなきゃならないかもしれない。そう思ったところで、もうそんな心配はいらないのだと気がついた。明日には、俺たちは大金を手にも、どこか違う街に旅立っている。あの穴倉に戻ることは、もう二度とないだろう。石橋は、とうとうついてこなかった。寝床から、小さな泣き声が聞こえていたから、起きてはいたのだろうと思う。だが、何度呼んでも、答えはなかった。娘は、あれからずっと黙ったままだ。だが口を開かずにいてくれることが、今はありがたかった。話をするべき時は終わったのだ。河口のあばら家は、すぐに見つかった。俺はその中に娘を入れてやると、全てが終わるまで隠れているようにと言った。これでもうお別れなのですか、と問う娘に、夜まではそばにいますよと、そう言ってやるのが精一杯だった。それから半日、俺は物陰に隠れたまま、富豪の親父がやってくるのを待っていた。もう春だというのに肌寒く、吹き荒れる風が嫌な予感を搔き立てる日だった。

あばら屋には、重油の匂いが染み付いていた。かつては船の燃料を保管するための小屋だったのだろう。小屋の外には、錆び付いたドラム缶がいくつもあるが、俺は、あばら屋のまわりをぶらつきながら、旦那が来るのを待った。荷車には、雑多なガラクタといっしょに頼まれたものが積んである。俺はあいつの目を盗んで小屋に入ると、娘に薬を差し出した。

隊長

隊長は、娘に近づくと、錠剤を一つ差し出す。

それを飲んだ娘は、やがて眠り始める。

それを確認するかのように、富豪が大きなカバンを持って現れる。

隊長は一瞬、富豪と目を合わせると、男に声をかける。

隊長

おい……！

男 あの前がやって来たのは、もう夕暮れも近くなったころだった。娘は疲れたのか、小屋の中でぐっすり眠っていた。これから起こることを考えれば、その方が都合が良かった。辺りは曇り空のせいで薄暗く、何もかもが灰色に沈んで見えた。瞬間、俺の耳に、赤子の泣き声が聞こえた気がした。

富豪 君か、噂に聞くせむし男というのは。

男 男はもってきた鞆を差し出した。

富豪 金はここにある。持っていてきたまえ。

男 だが俺は、用心深く辺りを伺っていた。

富豪 私は一人だ。何も恐れることはない。娘はどこだ。

男 俺は、あばら屋を指さした。寝ているよ。確かめたければ、のぞいてみるがいい。

富豪はあばら屋に近づいていく。

隊長は、警戒したように銃を向けてみせる。

男 男があばら屋に近づくと、隊長は銃を突きつけた。男は分かっているというようにうなずいてみせると、用心深く中を確かめた。娘は、ぐっすり眠っていた。

富豪 確かに、あれは娘だ。私の愛すべき娘だ。

男 金を渡せ。

富豪 そこに置いてあるだろう。自分で確かめたらどうだ。

男 (中を見て) ……いいだろう。

富豪 数えなくていいのかね。

男 そんな小さな誤魔化しをするような、ケチな男じゃないだろう。

富豪 ……。

男 これで、取引は成立だ。娘を連れて行くといい。俺は、隊長に目で合図をすると、その場を去ろうとした。小屋の中は見なかった。もう二度と、娘を見ることはあるまいと思った。

だが、富豪は小屋には入らず、去ろうとする男の背後から呼びかけた。

富豪 もう少しだけ、付き合ってはもらえないかね。

男は足を止める。

男 ……何をだ。

富豪 この事件の結末に、もう少しだけ色付けをしたいと思ってね。

男 色づけ？

富豪の合図で、隊長は男に銃を向ける。

男 ……！

富豪
ただ取引が無事に終わった、というだけでは、世間は拍子抜けするだろう。彼らはもっと、別の何かを求めている。もっと劇的な、胸の中をかき乱されるような何かだ。

男
何を言ってる…。

富豪
今、君たちが町でどれほど噂になっているか、知っているかね？

男
……。

富豪
恐ろしい姿をした悪魔のような男が、町を荒らし回っている。…そう、あれはきっと、怪物だ。

男
怪物…。

富豪
いいだろう。怪物。私がそう呼んだんだがね、町の連中はみな、目の色変えて「怪物を殺せ！」叫んでたよ。そうそう、つい昨日も神田の方で強盗事件があつてね、「また怪物が出た」と騒いでいたっけ。

男
おい、それは…。

富豪
君じゃない。もちろんだ。だが、世間はそうは思ってくれない。おかげで、仕事がいややすくなったよ。

男
お前…。

富豪
だから、仕上げをしよう。今ここに…彼が用意してくれた一缶のガソリンがある。

富豪は缶を蹴り倒し、中のガソリンをまき散らす。

男
何のつもりだ。

富豪
マッチ一本でこの小屋は、巨大な炎の柱になることだろう。

富豪の言葉に、隊長も動揺する。

隊長
待ってください。中には、まだ娘さんが…。

富豪
……。

隊長
俺はてっきりあいつを…！

男
……。

隊長は言いかけて、口をつぐむ。

富豪
どうしたんだ。君たちにとって、彼女はただの金づるだろう。彼女がどうなろうと、知ったことではないんじゃないのか？

何ら良心の呵責を見せない富豪を見ながら、男の脳裏には、かつて親から捨てられていた過去が蘇ってくる。

男
おまえ…娘を殺す気なのか？

富豪
……。

男 お前は…娘を愛していたんじゃないのか。それで一步も外に出さなかったんじゃないのか。

富豪 あの娘を？

富豪は笑い出す。

富豪 頭のねじが緩んだ娘をか。商売の役に立たん、あの娘をか。あんな娘が生まれたことを、恥と思いきそすれ、愛したことなど一度もない。

男 ……！

富豪 だが世間とはおもしろいものよ。せめて迷惑だけはかけんようにと部屋に閉じ込めておけば、溺愛のあまり屋敷から出さんと評判になった。あげくに今回のこの事件だ。私は悪党に妻と娘を殺された、哀れな男として名を挙げるだろう。あの馬鹿な娘も、初めて役に立ったということだ。

男 貴様…。

富豪に詰め寄ろうとする男を、隊長は銃で牽制する。

富豪 心配することはない。君に手出しはしない。犯人が生きていなくては、この悲劇は成立しないのだから。

男 …俺が全てをぶちまけたら。

富豪 それは無理だ。

男 なに。

富豪 君に何ができる。世間はどちらを信じる。これが、格差というものだ。

男 …人は、自分に都合のいい嘘を信じたがる。

富豪 今は辛い時代だ。苦しい時代には、敵がいた方がいい。日々の生活の苦しみも、孤独も忘れ、怪物退治に熱狂することができるのだから。今や君は、時代の寵児だ。この国の孤独と苦しみを一身に背負って、生きていきたまえ。

富豪はあばら屋に火をつけようとする。

その富豪に飛びかかり、火種を奪い取る男。

そして娘を連れ出そうと、小屋へと向かう。

が、その前に隊長が立ちふさがる。

そこを退け。

男 ……。

隊長…！

隊長は、ガソリンがまき散らされた地面に銃を向ける。

隊長 火種なんかいらねえよ。火花一つで、小屋は丸焦げだ。

男 …よせ、やめろ…！

隊長は男を睨みつけてはいるが、同時に逡巡している。

男 隊長、金が欲しいなら、くれてやる。あその金を持っていけ。だから、その銃をこっちへ寄越すんだ。

隊長 ……。

男 この十日間、お前だって満たされていたはずだ。娘の夢の中で、お前は英雄だった。その娘をお前が殺すのか。頼む、渡してくれ。

だが隊長は、銃をおろそうとはしない。

隊長 分かってるだろう。金じゃないんだ。怪物になるか、人になるかだ。

男 ……。

隊長 娘に恨みはねえよ。だけどな、俺にとってこれは、人になるための最初で最後のチャンスなんだよ。

男 よせ…。

隊長 悪いな…分かってくれ。

男 やめろ！

男は隊長に飛びかかる。

銃を奪い合い、もみ合う二人。

隊長は男を突き飛ばすと、引き金を引く。

銃声

男 その瞬間、小さな火花が散ったかと思うと、それは一瞬の間に膨れ上がり、まるで光の柱が天に昇っていくかのように、あいつの眠るあばら家を包み込んだ。

隊長 あ…。

その炎の激しさに、隊長は一瞬、おののく。

男、ナイフを取り出すと、隊長を刺す。

隊長はゆっくりと倒れていく。

男は小屋へと向かおうとする。

富豪 行くのかね。

男 ……。

富豪 君のその体では、とても助け出せまい。それともそれが、愛というものかね。

男 ……。

富豪 私には、理解できない感情だが。

男 あいつは俺を人間にしてくれた。あいつの前では人でいたい、それだけだ。

男、炎の中に飛び込んでいく。

富豪 怪物は、しょせん怪物だ。

富豪は去っていく。

S 1 2

荒川の河口

男は娘を抱きかかえたまま、富豪から逃れるように川の対岸へと渡ってきた。ずぶぬれになった娘の身体を横たえると、男はその身体を何度も揺さぶった。

男 おい…おい…!! しっかりしろ…!!

すすだらけになったその顔は、ピクリとも動かない。

男 死ぬな…死ぬんじゃない!! …死ぬな、セツ…!!

その声が聞こえたのか、娘はわずかに身体を震わせる。

男 おい…おい…大丈夫か?

娘は震える手を男に差し出してくる。

男はその手を握りしめる。

声…聞こえました。ずっとずっと…遠くから…。あなたの声が…。

…。

やっと…名前を呼んで下さいました…。

…。

犯人は…捕まらなかったのですね…?

え…?

悪者がまた襲ってきたのでしょうか? だからあなたがまた、守って下さったのですね。勇氣ある人…。

そうだとしたら…。

…。

お前は信じるのか? 俺の言葉を。

はい。

なぜだ?

だってあなたはただ一人、私のことを見てくださった方ですから。

男はその言葉に、思わず息をのむ。

男 娘 男
その時、俺はようやく悟っていた。どうしてセツが容易く俺についてきたのか、俺の嘘を信じたのか……。お前は俺と同じだ。

娘 男
……。
金持ちの家に生まれ、豪華な屋敷に暮らしていても、誰もお前を見ることはなかった。お前の心に寄り添い、手を取り合うやつはいなかった。お前はいつもひとりぼっちだった。そうだ。俺はあの時、俺とお前の手が初めて触れ合ったあの瞬間、お前の中に同じ孤独を見たのだ。俺はそれに気づいていた。気づいていて、目を背けたのだ。もし、お前の孤独を受け入れてしまえば、俺はお前から離れられなくなる。もし、お前と一度でも触れ合えば、その瞬間、これまでの俺はバラバラに砕け散り、もう二度と戻って来れなくなる。俺の孤独とお前の孤独は一つに解け合い、二度と別たれることはないだろう。

娘 男
……。
俺は……。それが怖かった。

娘 男
……。
俺が俺でなくなることが怖かった。

娘 男
……。
孤独を癒すことが怖かった。

娘 男
……。
一度孤独を癒したら、もう二度と、一人でいることに耐えられないだろう。

娘 男
……。
だが、お前はいつか俺から離れていく。

娘 男
……。
俺のそばに居続けることはない。

娘 男
……。
俺は、怪物だからだ。

娘 男
……。
たとえこの一時の夢の中、お前が俺を愛しても、夢から覚めれば愛のささやきは悲鳴に変わる。それを俺は知っている。

娘 男
……。
知っているんだ。

娘 男
……。
だから、もし……。もしこれが……。決して手に入らぬ夢ならば……。

男は、娘の首に手を伸ばす。

男 娘 男
お前が俺を壊してしまう前に……。俺は、俺はお前を……。

男が娘の首に手をかけた瞬間、風が吹き始める。
その風に煽られて、空から白いものが舞い降りてくる。
やがてその一片が、娘の頬に触れる。

男 娘

…これは、なに？
……。

二人が空を見上げると、それはまるで雪のように次から次へと二人の上に降ってくる。

男

桜…？

男は、不思議そうに辺りを見回した。

あたりに、桜の木などない。

それは、山に咲く桜の花びらである。

折からの風に煽られて、里まで舞ってきたのであろう。

男 娘 男 娘

桜？ それはいったい、どのようなものですか？

花だよ。

花…。

大きな木いっぱいに咲き乱れる花だ。冬の間、降り積もっていた雪が溶け、暖かな陽射しが草木の眠りを覚ます頃、桜は春の喜びをあふれさせるかのように薄紅色の花を咲かせる。そして人々は満開の花咲くその下で下、唄い、踊り、酒を酌み交わす…。喜びの木だ…。

男 娘

…。
その桜の花びらが、俺たちの上に舞い落ちてくる。まるであたたかな…雪のように…。

そう…。

……。

それはきっと…とてもきれいなんでしょうね。

ああ…ああ…！

男 娘 男 娘

男は何度もうなづく。

男

きれいだ…。世界は…なんでこんなにきれいなんだ…。

男は泣いている。

遠く、町で演説する富豪の声が聞こえてくる。

富豪

世界は未だ、混乱のただ中にあります。戦争の傷跡は深く、この町にも、人々の

心の中にも刻み込まれています。このような時だからこそ、我々は団結しなくてはならないのです。助け合い、励まし合い、手を取り合わなくてはならないのです。個人の欲望にあおられた、このような残虐な行為を許してはなりません。怪物は、必ずやその行いの報いを受けることでありましょう。

人々からは歓声が上がります。

男は、決して見えるはずのない富豪と、そしてその言葉に同調する町の人々の姿を睨みつける。

男

助け合い、励まし合い、手を取り合い……？ そうだろうな。俺たちを目の敵にしてりゃ、孤独を忘れる。見たこともねえ怪物の話に盛り上がり、仲間になることができる。だが、楽しいか？ そんな奴の言葉に煽られて、喚き立てることがそんなに楽しいか。たしかに俺は罪人だ。これまでどれほどの悪事を働き、人を殺めてきたことだろう。だがな、俺は生きるために手を汚すことはあれど、欲のために人を殺したことはねえ。

歓声は続いている。

男

お前らに人をさばく権利があるか。それが正義というものか。

歓声は続いている。

男

いいだろう。お前たちが俺たちを愛さないなら、俺たちがお前たちを愛する理由は何もない。お前たちが俺たちを怪物と呼ぶのなら、俺たちはお前たちを怪物と呼ぼう。セツ、俺はお前に約束しよう。必ずお前を安全な地に連れて行く。俺たちのことなど誰も知らない、どこか遠く、安住の地へ。そしていつか必ずお前の目を治し、桜の花を見せてやる。美しく咲き誇る、この喜びの木を。その時は、俺とお前、二人で喜びの歌を歌おう。それまで俺は、怪物だ。

S 1 3

山の中

男と娘は、山の中を逃げていく。

だが、どこへ逃げても追っ手がやってくる。

男はその度に人を殺し、金を奪う。

男の身体は、どんどん血に汚れていく。

娘

むかしむかし、あるところに、だれにもみえないかいづつがいました。だれにもみえないかいづつは、やまのなかでひとりぼっちでくらしてききましたが、まいにちまいにちすきほうだいにあばれていましたので、さびしくはありませんでした。でもあるひ、だれにもみえないかいづつはおもいました。「おれはこんなにすこい

娘 男

のに、どうしてだれもおれのことをしらないんだろう」そこでかいぶつは、やまをおりて、まちからひとりのおひめさまをさらってきました。「おまえ、おれのもだちになってくれるかい？」かいぶつがいうと、おひめさまはこたえていいました。「おまえがわたしのぞみをなんでもかなえてくれるなら、ともだちになってあげるよ」かいぶつは、おやすいごようだといいました。

つぎのひ、おひめさまは、のみのがほしいといいました。するとかいぶつは、かわのみずをすべてのみこんで、おひめさまのところへもっていきました。そのつぎのひ、おひめさまは、たべものがほしいといいました。するとかいぶつは、そのつよいうで、まちじゅうのうしやぶたやにわとりたちを、ぜんぶつかまえてしまいました。そのまたつぎのひ、おひめさまは、ねるところがほしいといいました。するとかいぶつは、そのおおきなあしでひとつとび、おうさまのおしろをもちあげて、もってきてしまいました。おひめさまはともよろこんで、かいぶつのほつぺたにキスをしてくれました。

かいぶつは、しあわせでした。だれにもみえないかいぶつは、おひめさまのかいぶつになったのです。かいぶつは、それでしあわせでした。

しあわせでした。

娘 男 娘 男 娘 男 娘 男 娘 男

ところが、おこったのはまちのひとたちです。「ぬすんだものを、かえしてくれ」まちのひとたちがいうと、かいぶつはいいました。「あれはおれがおひめさまにあげたんだ。かえせるはずがないだろう」するとまちのひとたちはおこって、かいぶつをころそうとしましたので、かいぶつはまちのひとたちをみんなたべてしまいました。おひめさまはそれを見て、たいそうよろこびました。「おまえのおかげで、わたしはこのよでいちばんえらいおひめさまになれるよ」

おひめさまのかいぶつのはなしは、となりのくにの、となりのくにの、そのまたとなりのくにまでひろがっていきました。もうかいぶつは、だれにもみえないかいぶつではありませんでした。おひめさまのかいぶつは、このよでいちばんおそろしいかいぶつになったのです。

かいぶつはそれでしあわせでした。

しあわせでした。

しあわせでした。

しあわせでした。

しあわせでした。

そんなあるひ、かいぶつはおひめさまにいいました。

「ねえおまえ、おれのおよめさんになってくれるかい？」

するとおひめさまは、おおわらわらいいました。「それはむりだよ。だっておまえはかいぶつで、わたしはにんげんじゃないか」

「おまえ、にんげんになるほうほうをしっているかい？」

「そんなこと、かんたんさ」

「どうすればいい」

「ほかのだれかを、かいぶつにすればいいのさ」つぎのひ、かいぶつはおひめさまをつれてまちにいきました。そしてまちのひとたちのまえでいいました。「このおひめさまがかいぶつだ」まちのひとたちは、あつというまにおひめさまをころ

してしまいました。そしておひめさまをつれてきたかいぶつき、まちのおうさまにしました。もうおそろしいちからであばれることはありません。かわのみずのみこむことも、おしろをはこぶこともありません。かいぶつは、ただのにんげんになったのです。ですがたくさんのひとにあふれたまちのなかで、ただのにんげんはひとりぼっちでした。

泣き崩れる男。

その男の前に、石橋が姿を見せる。

男
石橋…。

S 1 4
山の中

石橋
よ、よう…。

男
……。

石橋
ひさしぶりだな。

男
……。

石橋
なんだよ、ひどい面してるじゃねえか。噂じゃ、荒稼ぎしてるってのによ…。

男
……。

石橋
聞いたぜ。あっちこっちで人を殺しちゃ、金を奪ってるんだってな。なんだよ、お前も家を建てようってのか。怪物のくせに人間様の家をよ。

男
……。

石橋
今じゃ、おまえの噂を聞かねえ日はねえよ。

男
何の用だ。

男の声に、石橋はビクリと身体を震わせる。

石橋
な、何の用だと？ ふざけるんじゃないやねえぞ。そんなの、決まってるじゃねえか。

男
……。

石橋
今、俺がどんな目に遭ってると思う。手配書がまわってんだよ。ついこの前だつて、町の奴らに見つかって、殺されかけたんだ。やつらはな、怪物退治をしたくてウズウズしてんだ。

男
……。

石橋
お前はいいよ。だれかに見つかったってよ、簡単に人を殺せるもんな。でもよ、俺みたいなトロい奴はよ、いつ殺されるんじゃないやねえかってビクビクして、生きた心地もしねえんだよ。

男
……。

石橋
俺はよ…本当に思ってたんだぜ。お前がさ、あの子を連れて出て行ったあの日、そのままどっかに消えてくれりゃいいなって。あの娘と二人、どこでもいい、どこか遠くの誰も知らないところで、生きていってくれりゃいいと思ってた。だっ

男
石橋 男
それでお前が、隊長を殺して、あの娘まで殺そうとしただと……。だったら俺は何な
んだ。あのとき、お前を見送った俺はいいなんだったんだ。
違う、あれは……！
言い訳はよせ！
……。

石橋は銃を突きつける。

石橋
……。本当は何があつたのかなんて、それは俺には分からねえよ。だけどな、もうど
うしようもねえんだよ。退くに退けねえところまで来ちまったんだよ。俺はこの
まま死にたくねえし、生き延びるには、道は一つしかねえ。

男
娘を渡せ。

石橋 男
……！
この近くに隠れてんだろ。娘を渡せよ。そうすりやお前だけは見逃してやるから
よ。

男
お前……なにを……。

石橋 男
世間じゃ、あいつは死んだことになってるんだ。それを連れて帰れば、ちったあ
罪が軽くなるだろ。それどころか、無罪放免になれるかもしれねえじゃねえか。

……。

石橋 男
嫌とは言わせねえぞ。元はと言えば、すべてお前のせいなんだからな。あの時お
前が、お前があんな娘さえ連れてこなければ……。

石橋は銃を突きつける。

石橋
抵抗はするなよ。もうこの場所は、警察にたれ込んでいるんだ。グズグズしてり
ゃ、俺たちが一網打尽になるだけだ。生きていたかったら、さっさと娘を渡せ！渡
せよ！

だが男は口をつぐんだまま、あきらめたようにうずくまる。

石橋
畜生……畜生……！

石橋、震える手で引き金を引く。

しかし弾は男を逸れ、乾いた銃声だけが木々の間に悲しくこだまする。

石橋

……。

男

……。

石橋は惚けたように、銃をおろす。

男

石橋……。

その瞬間、男は石橋の首をつかみ、締め上げる。

石橋

……！

石橋はもう一度男に銃を向けようとする。

石橋

せ……むし……。

が、やがてあきらめたように銃を取り落とす。

やがて石橋の体から力が抜け、男が手を離すと、糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

男

……。

男は立ち尽くしている。

その肩が次第に震え始め、やがて男は泣き崩れていく。

若林

その時、雪が降り始めた。冬が始まろうとしていた。凍えるような寒さが、彼に幼いころの微かな記憶を蘇らせた。捨てられていた赤子の頃の記憶……。それは彼の心に残っていた、最後の希望を打ち砕くのに十分すぎる真実だった。

その真実を、男は絞り出すように口にする。

男

オレは、醜い男だ……。

若林

……。

親に捨てられたせいじゃねえ。山の中で立った一人、獣のように生きてきたせいでもねえ。何かを憎む、そのことでしか生きる意味を見いだせなかった、そんな俺の心の故だ。ああ、そうだ。俺を愛さぬ世界が醜いんじゃない。俺が醜いから、愛されないのだ。どれほどの嘘を塗り重ねてみても、それは変わらん……真実だ。

男の目に、石橋の落とした銃が映った。

それを拾い上げ、じっと見つめている男。

娘 あなた…あなた…。

振り返れば、丘の上には男の帰りを待つ娘の姿がある。

男 セツ…。

娘は変わらずに美しかった。

だが、その美しさは今の男にとって、苦痛でしかなかった。

自分がどれほど手を伸ばそうと、その美しさに届くことはない。

むしろ近づけば近づくほど、自分の醜さが娘を汚していくだろう。

男 オレは、醜い男だ…。

このまま自分の欲望のままに娘のそばにいるのか、それとも娘を置いて別れていくことが娘のためになるのか、それで娘は生きていけるのか、男は逡巡した。

若林

彼の手には銃。そして懐には、彼がそれまで必死にためてきた、彼女の治療費があった。銃と金…その二つを手に、彼は山を登り始めた。その先には、小さな小屋があった。彼が捨てられていたのと同じような、小さな小屋が…。

S 1 5

山の奥の小屋

男

あいつは、いつものように笑顔でオレを迎えたよ。「戻ったよ」「ええ、お帰りなさい」「よく俺だと分かったな」「分かるわよ」…あなたの足音は、他の人とは違うから、それですぐに分かるのよ。いつだったか、あいつはうれしそうに言っていた。「でも今日は、なんだか機嫌が悪そうね。何か、嫌なことでもあったの?」オレは何も答えることができなかった。「ダメよ、かんしゃくを起こしちゃ。あなたはすぐに思っていることが顔に出るから」「オレの顔が分かるのか?」オレが聞くと、あいつは小さく首を振った。「いいえ。でも、私の頭の中では、あなたはいつもいろんな顔をしてるわ。笑ったり、泣いたり、怒ったり…。私には、手に取るように分かるもの」「そこまで言って、あいつは微かに顔を曇らせた。「でもね」「なんだ」「あなたの目だけは、どうしても見えないの。何度覗き込んで、目だけは見せてくれないの」あいつはまるで、それがこの世で一番の悲劇だというかのように、哀しく首を振りながら、オレの顔に手を伸ばそうとした。オレはいつものように、身を引いた。そしてその代わりに、手を取った。あいつはいつもの困ったような笑顔を浮かべて言った。「私が知っているのは、この手のぬくもりだけね」「…」「他のだれより、あたたかい手…私だけの手…」だが、その声にいつものような元気はなかった。

男 娘
行くのね。
ああ。

娘 男 娘 男 娘 男 娘 男 娘

どこかずっと遠いところへ。

ああ。

ついていっては行けないの？

ああ。

どうして？

……。

どうして？

……。

この目のせい？ 足手まといになるから？ それとも……。

娘は震えながら、自分の顔に触れる。

私の顔の……やけどのせい？

……。

あの火事で、私が恐ろしい怪物のようになってしまったから……！

そうじゃない。お前は……何も変わらない。変わらずに……今も……美しい……。

しかし男は、娘に触れることはできない。

男 娘 男 娘

医者を見つけたんだ。これでお前の目を治してやることができる。お前はこれから、病院に行くんだよ。

あなたは？

……オレは……いっしょには行けない。

……。

遠くの街で、母親を見たっていう人がいたのさ。だからオレは、行かなきゃならない。だってそうだろう？ やつと見つけた手がかりなんだ。本当かどうか分からないが、それでも行ってみなけりゃ……。

そう話しながらも、男の嘘は、次第に力を失っていく。

二人はお互いに、それが嘘に過ぎないことを知っている。

やがて嘘の続かなくなった男は、不意に自らの罪を告白する。

……オレは、人を殺した。

……ええ。

一人や二人じゃない。何人も、何十人も……。

ええ。

そして今日、オレは石橋を殺した。

……。

お前と生きていたかったから。

……。

娘 男 娘 男 娘 男 娘 男 娘

男

だが、それがなんだというんだ。俺にいったい何の罪がある。俺は、生きてきたかっただけだ。ただ生きていきたくっただけだ。お前と一緒に。二人だけで。だがあいつらはそれを許さなかった。だからこの手にかけるしかなかっただけだ。俺のいったいなにが悪い。やつらだってついこの間まで、銃や爆弾で何千万という人を殺してたじゃねえか。銃や爆弾で人を殺すのは構わなくて、俺たちが生きるために人を殺すのはダメだというのか。そこにいったい何の違いがある。

これまでの人生、だれか一人でも、オレやお前のことをちゃんと見てくれたやつがいたか？ 知ろうとしたやつがいたか？ いねえだろう。奴らはいつだってそうなんだ。何一つ見ることもなく、何一つ考えることもなく、ただ周りのやつらに同調し、見たこともない怪物の物語に、よってたかって怒りをぶちまける。哀れな被害者の物語に、気軽に涙を流す。そんなものが正義か？ そんなものが人間か？ だったら、あいつらは何をした。あいつらの、あの罪なきその手は何をした。何も、だ。自分の手は汚すことなく、安全なところにおいて、ただ声だけを上げている。それが生きるということか？

……。

オレには、オレの罪が分からない。オレはこれまで何一つ間違っただけをしてきていないし、後悔することも決していないんだ。

男 娘

男の叫びはそこで途切れる。

娘はじっと男を見つめている。

雪は、すべての音を飲み込んでしまったかのように、静かに、二人の上に舞い降りている。

男

……だけどな、おまえ、オレの心の中では、ずっと何かがかかっているのさ。恐ろしい声で叫んで暴れ回って、オレの心を突き破ろうとするのさ。そして今日、ついにやつはオレの心を引き裂いて、オレはそいつに飲み込まれてしまったのさ。オレは怪物になっちまったんだ。だけどお前だけはそうはさせない。オレの醜く歪んで、血に汚れた手で、おまえを汚すことは決してない。お前はこの世のだから、私も美しかったし、そしてそれはこれからもそうだ。

……。

だから、おまえ、愛しい人よ、オレたちはここで別れなきゃならない。お前が永遠に美しくあるために、オレの夢であり続けるために、オレがこの先、生きる意味を持ち続けるために。それがオレが犯さなきゃならない、最後の罪だ。

男 娘

娘は寂しく笑う。

もし、私の目が治ったら……。

……。

満開に花咲く桜の木の下で会いましょう。あの日あなたが、約束してくれたように。

娘 男 娘

男 あの日、オレが約束したように。
娘 そうしたら、やっとあなたの目が、見えるのね。

娘、まるで今、桜の花びらが舞い散っているかのように、空を見上げる。

娘 ほら、見て。降り積もる桜の花びらが、私を覆い隠していくわ。私の手も、足も、
男 なんにもかも……。私の姿がだれにも見えなくなってしまっただけに……。

娘 ……。
娘 きれいな……。世界って、本当にきれいな……。

男、娘に銃を向ける。

娘はそれを知っているかのように、男に向かってはっきりと笑いかける。

娘 私はここにいるよ。ずっとここにいるよ。

問

男 オレがあいつを見たのは、その時が最期だ。

若林 ……。

降り積もる桜の花びらに、あいつの姿は消えちゃった。

若林、泣いている。

S 1 6

取調室

男 それから、何をどうしていたのか……覚えちゃいない。気がついたときには、取っ
男 捕まってここに放り込まれた。

若林 ……。

これでお話はおしまいだ。

男は泣いている若林を見下ろしながら、小さく笑う。

男 たしか……俺を救ってくれるんだったな。だったら道は一つしかねえよ。俺を今す
男 ぐ殺してくれ。あいつを失った今、俺にはもう、この世に生きる意味はない。こ
男 れ以上、世間の連中のさらし者にされるのは、まっぴらごめんなんだ。

若林 なぜ……。

男 ……？

若林 なぜ、逃げなかったのです。捕まれば、死刑は確定だと分かっていたはずですよ。

男 たとえ二人、別れなければならなかったとしても、生きていれば、そうすれば……！
男 俺は怪物だ。怪物は、人間に退治され、めでたしめでたし……。それが、物語って

男は、不意に笑い出す。

男 喜ぶんだろうな、世間の連中はよ。連続殺人の犯人が恐ろしい怪物の俺じゃなく、美しい女だってなったらよ。これまで天女のようにあがめてた連中が、手のひら返したようにつばを吐きかける姿が目に見えかぶよ。

若林 ……。

男 それがお前の望む物語か？ それがお前の正義か？ だったら好きにしろ。だがな、そのときには、俺はたとえこの首一つになってもお前を殺していくぞ。

若林 なぜあなたはそこまで彼女をかばうんです。彼女の方はあなたを…！

若林は、不意に口をつぐむ。

男 なんだ。

若林 いえ…。

男は小さく笑う。

男 構わねえから言えよ。あいつはなんて言ってる。事件の犯人は、だれだと？

男を指差す娘の姿が見える。

若林 ……あなたです。

間

若林 あなたです。全ては、あなたのやったことだと。

男 ……そうか。

若林 ……。

男 そうか。だったら、それでいい。

若林 え？

男 もう何も言うことはない。

若林 なぜあなたはそこまで…！

男は、晴れやかな笑顔で、

男 愛だよ。

若林 ……愛？

男 そうだ、愛だ。たとえあいつが何を言おうとも、初めて手と手が触れ合った、あの喜びは何も変わらない。あの日、あの河原で見た、桜の美しさは何も変わらない。

若林

い。俺の心の中に生まれちゃった、人間ってやつは消えることはない。

……。

男

たった一度でいい。心の底から愛し合ったことがある。ただそれだけで、俺のこの人生には意味がある。俺がここにいることで、あいつの苦しみが少しでも和らぐのなら、俺は喜んで怪物になろう。今、分かった。オレはずっと愛されたいのだと思ってきた。だがそうじゃない。俺はだれかを愛したかったのだ。心の底から愛したかったのだ。見返りなどいらぬ。優しい言葉も、慰めも、懺悔の言葉もいらぬ。俺は、愛することができたのだから。たとえこの先、この世界のすべての人間が、オレを非難し、蔑み、見下したとしても、俺の体を牢につなぎ、殴り、痛めつけ、首に縄をかけようと、俺が息絶えるその最期の瞬間に、あいつの幸せを願う、その自由を奪うことはできない。俺の中の人間を奪うことは、だれにもできないんだ。

男は、もう二度と見ることない娘に向かって手を差し伸べる。

若林

以上が、今回の事件の真相です。ですが、これをお聞きの皆様、どうか忘れないで下さい。これも、すべては私が語った物語に過ぎません。だれの物語を信じるか、それは皆様が決めることであり、あなたの信じた物語があなたにとっての真実です。本当の真実など、この世のどこにもないのです。

若林、男を見つめている。

男

今、俺は初めて幸せだ。最高に幸せだ。

幕